

人生のターニングポイント

唐沢 泉

特定医療法人厚生会木沢記念病院(岐阜県美濃加茂市)産婦人科・小児科婦長

流 転

2回目の成人式を迎えた今、自分の人生を振り返ると、新幹線のようにひたすら走り続けた中で、人生における数々のターニングポイントがあったように思う。

私は助産婦学校を卒業後、国立病院の産科病棟に就職した。5年間働き、大学へ行こうと決心をして退職した。分娩当直のアルバイトをしながら、受験勉強をしようと考えていた。ところが、恩師の勧めで国立療養所の整形外科に就職することになった。恩師曰く「助産婦を続けるなら、1~2年は成人を勉強したら? 大学は幾つになっても行けるから。もっとすべきことがあるでしょう?」。単純な私は、すぐ納得したのである。しかし、「すべきこと」は良くわからなかった。

その年の12月、私は大学のⅡ部を受験することにした。その提出書類の中に、「施設長の推薦書」があった。婦長に相談し、お願いしたところ、快諾してくださった。それなのに、看護部長室からお呼びがかかったのである。いやな予感がした。話の内容は、「某国立病院の産婦人科病棟に外向してほしい」ということだった。この頃の私は、結婚しようかどうか迷っていた時でもあった。ここで外向したら、しばらく仕事を辞めることができないことはわかっていたが、悩んだ末、外向することにした。

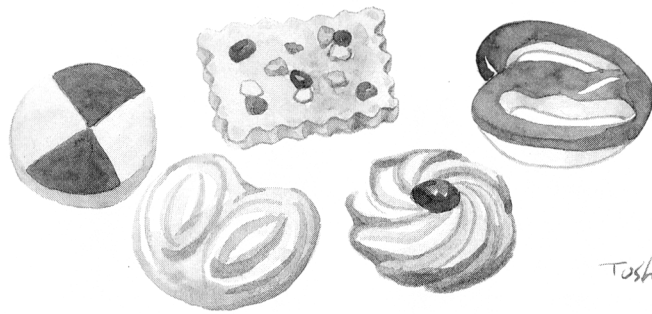
無知の知

外向して2年後、厚生省看護研究研修センターの看護教員養成課程を受けることになった。しかし、その前に婦長試験があった。看護部長に「教官になろうとする人が、婦長試験に落ちたら困ります」と言われた。私にはこの言葉が冷たく響き、“負けるもんか!”と発奮した。

運良く婦長試験、センターの試験をくぐり抜けた。私の心は、桜咲く東京のことでいっぱいだった。しかし、現実には病院内ではスタッフの産休・研修などで助産婦が不足していた。そんな中、婦長さんが自ら準夜をしてくださったのである。私は驚くやら、感激するやら、複雑な思いを抱きつつ出発した。

1987年、厚生省看護研究研修センターの研修生となった。研修生のバックグラウンドは、みな素晴らしかった。周囲を見渡すと優秀な人ばかりで刺激を受けた。お互いに専門分野の知識の交換をしたり、理論を教えてもらったり有意義だった。ある人は、すでに教員の助手として看護教育に携わっており、通信教育で大学の勉強もしていた。ある人は専門学校が短大になるから、教員が大卒でなくては、学生と釣り合いがとれないということで今年の冬は大学受験をしようと言い勉強をしていた。要するに、2足も3足も草鞋を履く人が山ほどいたのである。

中でも千葉大学看護学部卒業の男性が書いたレポートを読んだ時は、カルチャーショックのパン



チを受けた。研修中、あるレポート提出があった。私が書き上げたところ、彼が来て、私のレポートを見せてくれと言うので抵抗なく見せた。彼は私のレポートを褒めたたえてくれた。自分のはどうかと、彼が自分のレポートを私に渡した。彼は、「今一つ納得がいかない」としきりに言っていた。調子に乗った私は偉そうに読み始めた。私は1枚目の半分くらいから頭がガンガンしてきた。素晴らしいのである。自分の考えが明確であり、文献照合、文章力等、すべていいのになぜ？

この日を境に、私は“読書家”に変身したのである。とにかく、欲しいと思った本は買うことにした。私は、自分の無知を嫌というほど知ったのである。

さらに、大学の法律学科で専門科目の講義を受け始めた。周囲は男子学生ばかりだった。彼らは法律事務所勤務や地方公務員の税専門家であったり、教授の質問には簡単に答えるのである。私は自分が情けなくなった。しかし授業に悪戦苦闘しながらも良い友達ができ、社会科の教員免許を取得することもできた。

人間と魂

私は仕事・勉強・家庭と三権分立ができないかといつも考えていた。仕事がいやになった時期、逃避を考えた。それが結婚だった。しかし、神様は逃げる私が嫌いなようである。仕事において次々と試練を与えてくれたのである。結局、転勤の多い国立病院は退職した。

それからは心のバケーションの始まりだった。退職後の1年間は、依頼された講義に行くだけで思う存分読書を楽しんだ。魂・心・霊についての本などを読みあさった。

私は自分のことは、自分を信じて自分で考えなさいという主義である。例えば自分の身にふりかかる大変なことは現世における自分の修業と考えれば、辛いことがなくなる。これは発想の転換のようなものである。この考えは、何人ものターミナル患者をお見送りした経験から形成されたのである。

私は病院勤務の頃、患者さんが他界するときに、“この人とは、もう会えないだろう”と感じた。朝、患者さんが夢に出てくると、その方がその日に他界するということがあった。また、お見送りした後、その病室に行くと寒気がし、鳥肌の立つことがあった。人間は死ぬ時、自分の一生を反省するのかもしれない。この世に未練を残した人が他界した時、病室で何かを感じるのだろうか。不思議なことに、赤ちゃんには何も感じない。

私は、ゆっくり、じっくり各駅停車をして後悔のない人生を歩みたい。そのためには、修業を積んだ高僧のせめて真似をして心穏やかに、日々前進し、はつらつとした毎日にしたいと考えている。

さて、今回は読書家で博識、私の尊敬する高島早苗さんをご紹介します。